

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-620	24-078	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳)		
Relationship between alcohol use and overactive bladder disease: a cross-sectional study of the NHANES 2005-2016 飲酒と過活動膀胱疾患との関連 : NHANES 2005~2016 に基づく横断的研究		
執筆者		
Zhang Y, Qin W.		
掲載誌		
Front Public Health. 2025 Jan 3;12:1418117. doi: 10.3389.		
キーワード	PMID	
過活動膀胱、米国国民健康栄養調査、飲酒、下部尿路症状、尿失禁	39830172	
要 旨		
<p>目的 : 過活動膀胱 (OAB) は、尿意切迫感、頻尿、夜間頻尿、切迫性尿失禁などを特徴とする一般的な泌尿器疾患であり、生活の質に大きな影響を与える。アルコールは利尿作用を持ち、OAB 症状を悪化させる可能性があるものの、これまでの研究結果は一貫していない。本研究は、米国の大規模な国民健康栄養調査 (NHANES) のデータを用いて、飲酒と OAB との関連を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法 : 2005 年から 2016 年の NHANES における 20 歳以上 7,805 人のデータのうち、飲酒頻度と飲酒量および、Overactive Bladder Symptom Score (OABSS) により評価された OAB 症状データを用い分析した。飲酒頻度 (月あたりの飲酒回数) および飲酒量 (四分位分類) と OAB との関連はロジスティック回帰および順序ロジスティック回帰を用いて評価し、年齢、性別、BMI、糖尿病、高血圧、教育歴、所得などで調整した。</p> <p>結果 : OAB の有所見率は 12.4% であり、OAB では非飲酒者、女性、高血圧、高齢、低所得の傾向があった。単変量ロジスティック回帰では、非飲酒群に比べて月 10 杯以上飲酒群の OAB リスクは有意に低く (OR=0.41, 95%CI: 0.30–0.56)、多変量調整後も OAB リスクが有意に低かった (OR=0.64, 95%CI: 0.45–0.92)。また、飲酒量が最低四分位群に比べ、第 2 (OR 0.75)・第 3 (OR 0.74) 四分位群で OAB リスクが低かった。</p> <p>結論 : 飲酒は OAB の発症リスクと逆相関を示し、適度な飲酒は OAB の予防因子となる可能性がある。長期的な飲酒は OAB のリスク因子ではなく、保護的に作用する可能性もあるが、関連性を明らかにするためには大規模臨床試験が必要である。</p>		